

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03012

研究課題名(和文) 日本中世の内乱と飢饉・災害の関係の研究 治承・寿永の内乱について

研究課題名(英文) Research on the influence which war had on famine or earthquake damage -- Be targeted at a Genji-and-the-Heike civil war.

研究代表者

高橋 昌明 (TAKAHASHI, MASAOKI)

神戸大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：30106760

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：源平の内乱期中(1180-1185年)には、飢饉が多発し、内乱終了直後に巨大地震が起こった。

その期間中に気候が異常だったのが、京都で飢饉が発生した唯一の原因ではない。反乱が起こったことで、納税者たちが、朝廷と荘園領主たちに、租税や年貢の支払いを滞納し始めた。そのため京都の住民も多く餓死したのである。また戦乱が続いた結果、京都に建築資材や大工たちを、集めることが難しくなった。多くの住宅のメンテナンスが、不十分な状態が続いたので、地震が起こった時、被害がより拡大してしまった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦争は戦闘員だけが死傷などの被害を被るだけではなく、直接戦場にはない住民や社会システムにたいしても破壊的な影響をおよぼすことがある。源平内乱の結果、年貢や租税が上納されなくなることで都人の食糧の確保が困難になり飢餓状態が訪れた、また建物などのメンテナンスも不十分になり、その状態のまま戦争終了直後、巨大地震が発生したため、想像以上の被害が発生した。その事例研究である。

研究成果の概要(英文)：During Genji and the Heike's civil war term (1180 to 1185), famine occurred frequently, and the massive earthquake happened immediately after the end of a civil war.

That whose climate was unusual during the period is not the only cause which famine generated in Kyoto. Taxpayers began to default the payment of a tax or land tax to Imperial Court and manor feudal lords because the uprising took place. Therefore, many residents of Kyoto also starved to death. Moreover, as a result of war's continuing, it became difficult to gather construction materials and carpenters in Kyoto. Since the state with an insufficient maintenance of many residences continued, when an earthquake happens, damage has been expanded more.

研究分野：日本史学

キーワード：反平家の拳兵 兵糧米の徴収 在地の荒廃 年貢・租税の未納 天候不順 干害 1185年9月の京都地震

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

治承・寿永内乱(いわゆる源平内乱)を考えると、昔から源平両氏の戦争、あるいは覇権争いという政治史中心に考えることが多かったが、この内乱はそれだけでは全体をとらえきれない。源平両氏の抗争と直接関係のない人々の反乱が全国各地に頻発し、内乱期間中に深刻な干ばつや悲惨な飢饉なども発生し、戦後はこの期間になくなった人々の怨霊鎮撫のための宗教行事が大々的に行われるなどのことが、十分自覚されてこなかった。

2. 研究の目的

この内乱期にまず大きな干ばつがあり、続いて深刻な飢饉があしかけ三年にわたって発生している。また内乱終了直後、京都を大地震が襲い大きな被害が出た。この研究は、なぜ飢饉が発生したのか、なぜ地震被害が大きくなったかを考える点にある。たんに自然環境の変調だけでなく、社会的・政治的背景があるとすれば、それは何かということをはっきりさせる。そのためには内乱以前の社会、すなわち院政期、とくに荘園が激増した鳥羽院政期までさかのぼって考察する必要がある。

3. 研究の方法

古文書・古記録・年代記・顕密仏教の聖教・文学作品など文献史料を精査し、内乱発生の根本的な原因を探求し、それと飢饉の発生を関連付ける。内乱中に貢納物が京都に上がってこなくなり、都人に飢餓が発生するのは、ある意味当然である。では地方ではどうか、それを具体的に明らかにする。また建築用資材や補修のための人夫が京都に上がってこないということは、京都の建物のメンテナンスも不十分になっていた、ということである。そのことが、地震被害を大きくしたとの見通しで、それを具体化する。

4. 研究成果

(1) 飢饉が深刻化した背景を論じた既発表の論文2編「高野山根本大塔領大田荘の始動と鑿阿の働き」「西行と南部荘・蓮華乗院」を、さらに論証と論点を豊富化し、内容充実させて、下記論文集に収めて出版した。

(2) 飢饉の発生は、干ばつという自然環境の変調によるだけでなく、戦乱によって上納が難しくなったという口実で、地方から京都に租税・年貢などの貢納物が上がってこなくなり、都人が飢え、各種の儀式・宗教行為などが行われなくなったという面が、詳しく明らかになった。さらに戦鬪を遂行するために大量の兵糧米が必要ということで、無理な徴発が行われ、農村自体も飢えた、というもうひとつの原因がある。

(3) 兵糧米の収奪はそこが戦鬪地域であるか否かを問わない。非戦鬪地域にも過酷な収奪があった。兵糧米は、規定の貢納物の一部を充てるのが原則という史料を発見し知見が深まった。しかも実際にはそれは守られず、従来の年貢・租税のほかに、多大の兵糧米の徴集が行われ、農村の疲弊は加速した。

(4) 当時の軍隊の兵士・運搬人夫の供給源は、地方の公領・荘園の民にあった。成人労働力が兵士や人夫に駆り出されることにより、農業のための労働力が不足した。一方、かれらは参戦の動機がない。権力によっていやいや徴兵され戦場に赴いた。それで、戦争は危険だが稼ぎの機会でもありと考え、戦場やその遠征途上で見かけた村々で、その年の収穫物はもちろん、来年の種分まで略奪してしまう。部隊の上層もそれを見て見ぬふりをする。これらによって、さらに農村の荒廃が進んだ。

(5) 内乱によって、荘園・公領制は支配制度としても大きなダメージを被った。内乱が終息しても年貢徴収対象地は極端に減少した。そこから支配を再建するためには、内部組織の改編補強だけでなく、院政期の地方社会に課せられていた過大な負担を緩和する必要がある。年貢・公事などを減額するためには、現地の耕作状況を把握し、年貢の負担対象地を縮小する必要がある。そのため内乱終息後に、各荘園で本格的な土地調査がおこなわれ、年貢徴収対象地を三分の二程度まで縮小する措置をとった荘園もあった。負担の軽減が進んだことによって、地方に富が滞留するようになり、地方社会を基礎とした鎌倉時代という新しい時代が発足することができた。

(6) 元暦二年(1185)七月九日の京都大地震の惨状を具体的に復元した。それとともに同地震は従来京都岡崎を震央とするM7.4クラスの地震といわれているが、その判断には理系研究者の、信用度に乏しい史料の、しかも不正確な解釈にもとづいている面があることを明らかにした。歴史学では、同じ情報を記す史料がいかに多くとも、それらが不確かな史料であれば、多数決はとらないし、エビデンスとはしない。同時に内乱によって人や資財が京都に上がってこなくなり、建物の平常のメンテナンスが不十分だったことが、被害を大きくしたことを具体的にあらわにした。

(7) 研究の目的とするところを、治承・寿永内乱史のなかに位置づけ、広い視野と展望をもった独立した著書として刊行するため、準備を進めている。これについては、ある出版社の編集者の理解を得、その督励のもとに現在文章化の最中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋昌明	4. 巻 32
2. 論文標題 戦国戦史と帝国陸軍	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本歴史学協会年報	6. 最初と最後の頁 2 ~ 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 高橋昌明	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 280
3. 書名 武士の日本史	

1. 著者名 高橋昌明	4. 発行年 2016年
2. 出版社 校倉書房	5. 総ページ数 366
3. 書名 東アジア武人政権の比較史的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----